

「終焉」

全てを静かな気持ちで受け入れられたとき
私は御胸に抱かれ
世界の終焉を見つめておりました

木々を焼き付くした炎は次第に広がり
絨毯のように地球を赤く染めてゆきました

そうして
いつのまにか私の足元まで炎は迫り
肉を焼き骨を焦がしました

不思議と熱さは感じず
ただ日だまりに似たあたたかさを身に受けておりました

優しい手が触れ
私はあなたが神なのだと気付きました

跡形もなく私を壊してください
塵と化すまで砕いてください

醜いこの身体を棄て
清らかな魂を抱いて
私はもう一度生まれ変わるのです

ですから
綺麗に焼いてください
上手に埋めてください

それが私の望みなのです

「階段」

女、声を発しようとする。

（その声にならない自分の声を聞いて）誰の声？
声だけが浮かんでいるよう

でも今のこの声は
あの人の声？

わたしの足が響かせた音が、
波紋みたいに広がって
あなたの足音を産み出す

あの日の午後、あなたは笑っていた
でも、何をしゃべっていたのか思い出せない、
あいまいな笑顔、動かないくちびる、

いつまでたっても出て行ってくれない
目を閉じてても、
耳をふさいでも。

必死に追い出そうとするのだけれど、
そうしようとすればするほどあなたはどんどん目前に迫ってくる。

忘れようがない。
あなたがわたしにかけてくれた言葉のひとつ、ひとつ、
その端々まで覚えている。

その言葉はもうわたしが所有しています。何重にも、くるんでおいて。
わたしにくれた言葉なのだからわたしのものに決まっている。
いまさら手放して欲しいなどと言われる方が無理な話。

遠い音がする・・・

あの人はどこにでもいた。

見上げた窓、水溜りのきらめき、木陰、戸棚の奥にも。

わたしはどこへでも行った。

まばたきの端に 予感を灯して。

でもね、もう分からないの・・・
見えないんです、あなたの顔が・・・

面影をたどって行って
なにげないささやきを拾おうとするのだけれど

どんなに集めてもあなたにはならない

ぽつんと

空に吐く息と

取り残されたわたしがいるだけ

自分の重みが

満ちていくたび

なんだか立っていられなくなる

そっちに行きたい

手をのばせば

すぐに触れられると思っていたようで、

凍結した狭間で

待ちくたびれている

輪郭だけが

まったく まわりから切り離されて

さまよっている

ここにあらず

でも

どこかにはいる、

あなたの存在が

わたしがここにいることを許してくれるんです

はじめまして

何と名付けたら良いのでしょうか

言葉遊び

なつかしい眺 目ンた まんとひひ からびた そがれに んにく にんにん げんこつ いつ
いないしよ でんぐりがえし てやったり んごは赤い 赤いはりんご ころうさん さん
いち よこれーと っとととととと トメイトウ おっと ご名答 間隔に並んだ 並んだ
あかしろきいろ どの花みて もうじき したじき かせんじき もひとつおまけにくもんじき
ンコーンカンコーンコーンカーン こんがらがってまわって穴があつたら入りましょ し
よつしよつしよ ショックでコックがノックをくらってよつてたかつてとりなしもてなし、あつら
えこしらえ食うか食われる大戦争 ほうれん草 地層 あつそう そうそんなこんなで遭難 こ
ごどこ そごどこ あれどこ どごどこ どっこいどっこいはつけよい ドン がらがっ
ヤンプー かり、ふかり、どっぷりびつくりどっ 去り行く月日の早きこと わかよたねそ、つね
ならん